



文武両道

中南信支部長 小林茂昭(五四期)



関東支部からの新聞がどいた。その中で、小山壽一新校長先生が「文武両道」を説いておられた記事を読み、四十幾年前の昭和二十八年、私が上田松尾高校に入学した当時校長であった中沢睦二郎先生の朝礼の言葉を思い出した。中沢校長も「文武両道」を説かれた。中沢校長から当時(少なくとも私が)受けたメッセージは、要するに一流大学の進学率がよいことと運動部が全国大会に出てよい成績をあげることであった。ただ、一人で両方を全うできることは、きわめて難しいことなので、言うなれば手分けしてでもやってほしいというお気持ちも伝わってきた。確かに、学校全体として文武両方に秀でていくことは、その相乗作用により全体のムードと意欲が高揚して、文武それぞれがさらに向上しようというところである。私自身は個人として文武両道を遂行しようと思ひ、柔

道部にはいつて体を鍛えようとしたが二年の中ころになって、激しく練習すると動悸がして体力的に続かなくなってきたこともあった。当時は校長の号令もあつたか確かに上田高校は学校全体として文武両道に秀でていたように思えた。一方、いまにして思えば、文武両道の価値観に当てはまらない他の価値観を求めていた学生も中にはいたのではなからうか。

小山現校長は、「文武両道」は学校全体で実現されるものではなく、個人において実践すべきものとしている。確かにそれは、理想ではあるが、なかなか難しい。両方とも中途半端の結果になりやすい。文武両道というからには、両方ともかなり精通していることを意味するのではなからうか。「道」というのはそういうものである。

「良く学び、良く体を鍛えよ」という、基礎学力、基礎体力をつけることをモットーとする小・中学校の教育とどう違うのであるうか。現代の上田高等学校の目指す教育はその延長線上にあると捉えてよいのであろうか。

いずれにせよ、人間は常に

頭のみをつかっているのは非効率で、体を動かすことが、すなわち、体調を整えることが、脳の働きもよくすることに、生理学的にも両方を動かすことは必要とされる。勿論、この生理的に頭と体を鍛えることと、文武両道に秀でることとは必ずしも同じではないであらう。

私が属する大学の一医局においては、常に学問的に新しい治療法や有効な薬物を開発したりして実績をあげ、論文を国際誌に発表することが求められている。そういう中でも、スポーツは奨励されていて、たとえば野球の医局対抗試合に勝つような努力がされている。スポーツが強いと部局全体として意気高揚して仕事の実績が上がり大切なこととされる。

一方我々生物個体にとつては、週末はゴルフをすることか、適当にリラックスすることが必要になる。人間は常にテンションを高くして奮進のみすることは出来ない。休養、充電が必要である。働くとき、つまり学生にとっては勉強するとき、また運動を真剣にするとき、体は交感神経が緊張状態にあり、一方、休むときには副交感神経が作動している。休養のためのスポーツは「文武両道」とは意味合いが違い、「良く学び、良く遊べ」ということに近い。従つて、「文武両道」とは、文武両方とも良

く学び」の方に入るのであろう。

いずれにせよ、上田高校同窓生としては、母校から離れて外からみているので、おのづから、母校全体としての文武両方に好成績を望むしかないが、生徒個人々が高校生活を通じて、より良い人間形成がされるよう望みたい。

▶▶▶平成14年 総会のご案内◀◀◀

- ・日時: 11月17日(日) 午後2:30~
 - ・場所: ホテルモンターニュ松本(旧マウントホテル:松本駅西口出て北側)
- ☆実業界・芸術界から二氏の特別講演☆



「アメリカ人になった、
一日本人の私見」
Ms. Kimiko Powers
(前田 喜美子氏、54期)

1960年国際基督教大卒業。同年英国航空に入社、スチュアーデスとして勤務。'63年結婚。ニューヨーク及びコロラドに居住。

出版社社長であったご主人は、定年後、日本の古美術・米国の現代美術の収集家として有名で、協力して著名なコレクションを築く。'99年のご主人の死後、日本にて建築関係の(株)パワーズプロジェクト マネージメント・(株)パワーズ アンリミテッド設立。同社社長。

日本では子育て、老人施設設立を目的にする福祉法人「パワーズ エクシード」設立申請中。米国ではコロラドの牧場にコレクションを展示、研究する施設「Powers Study Center for contemporary art」計画中。



「ハウスラブヨッホの
ホモ・ティロレンシス」について
真道 茂氏
(旧姓 長崎、54期)

1961年東京芸術大学彫刻科を首席で卒業。卒業制作「飢え」は文部省買上、芸大所蔵。

'70年から'76年にかけて各種国際シンポジウム参加。特に'74年ウィーン国際彫刻シンポジウムでの「Freude」は地元新聞で最優秀評価を受け、現在ウィーン市所蔵。個展は'66年より現在に至るまで東京・ウィーン・諏訪で開催。

その他の主要作品としては、帝国ホテル、坂城町庁舎、日置電機、ニッポンレンタカー本社、川崎平和公園、上田市創造館の各々のモニュメント等多数。

| | | |
|------------|-------------|--------------------------------|
| 第一部 総会・講演会 | 午後2:30~4:30 | 会費 ¥8,000 (通信費含む、第一部のみは¥1,000) |
| 第二部 懇親会 | 午後4:30~6:30 | 同封のハガキにて出欠・近況をお知らせください |

頭が上がるらない!

宮澤芳雄(三七期)



昭和十二年十月、私は上田中学五年生であつた。当時の日本は蘆溝橋一発の銃声から始まった日中戦争の物騒な状態に陥り、国家総動員法が発令されて、あらゆるものが軍の統制と支配下におかれようとしていた秋であつた。

上田中学は、松本中学、長野中学と並んで県下の地味な進学名門校として数えられていた。その頃の教育は上意下達を基本とし、生徒会もPTAもなく教師の指示と裁量は絶対であり、従つて独断的で高圧的な教師も多かったが、それぞれが志操を持ち、教え導くことに力を張つていた。「教師は聖職」とされて今日と違つて年少者が上級者に口答えや、反抗等はゆるぎない、或る意味ではまことにやり易い、「教えの庭」であつたと思つた。

私達同級生には、教師達が目置、英語の片岡、数学の大塚、国漢の武井といった連中が目白押しで、横田地君は鶴見祐輔氏(小説母・子で有名)

がウオレン・ヘンシングの伝記を中学三年で読んだと知つて、俺もやるぞと中学四年の夏休みに読破した(原文ですぞ)そうである。従つて出来ない私なぞ、教師は鼻もひっかけられなかつた。

この上田中学も時流に沿つて、私達が入学した昭和八年からは、一校庭運動会(なぞ)という、お祭り騒ぎは廃止され、それに代わつて上田城址上田飛行場しねずみ橋し秋田坂し母校という全長二十数キロのマラソン競争が正規の授業に繰り込まれてい

た。ところが、同級生中、横田地、小川重治、大塚次郎、片岡重俊、池田正司、金澤和秀、中村高雄、岡清助、小木曾進、等々学業成績優秀な連中がいつの間にか競争意識が湧き、運動会をややら「さういふことになつたらあつた。」(落ちこぼれに該当する私なぞ話もかけてもらへなかつた)そら或る日、突然全校生徒は課業終了と同時に最上級生である彼等によつて講堂に集合させられ、尚出入り口には柔剣道の有段者の猛者が立つて警戒する、異常な雰囲気の中で全校生徒集会が行われた。



次馬の声も、あまりにもリアルな記述に、驚くと同時に、はたしてこれでよいのかと、考えさせられる結果となつた。人は、過去の出来事とその時はつらかつたり、苦しかつたりしたこと、年とともになつてい出く、やがては甘美な思い出となつてくる。昔の思い出にふけることは、もしかすると、甘い飴玉を、口の中で楽しむのに、似ているかも知れない。そして、思い出の飴玉は、誰も一つづつ持っているのだ。しかし、当人には、甘い飴玉も、他の人には、苦かつたり、酸っぱかつたり、人によつては、口に入れたとたん、顔をしかめて、吐き出してしまふかも知れないのだ。この飴玉の、やつかいなところだ。

来し方の、なつかしい思い出に、浸りたい時は、胸のポケットから、思い出の飴玉を一つ、取り出して、一人静かに口に含んで、しばらくは静かに、事もなく流れて行く。しかし、そのうちに、甘く切ない飴の味を誰かに知ってもらいたくなるのも、人情というものかも知れない。その時は、よくあたりを見廻して、大切な飴玉を口に入れて、顔をしかめない人を選んで、「お口に合いますかどううか」とつぶやいて、そつと手渡すが、分別と言ふものではないだろうか。手元にある、自分史が読むうちに、そんな気がして来た。

思い出と近況

吉村 哲郎(六六期)

校に問い合わせや、かけつけるという事態になつた。教師側がこの集会を、「生徒の本分を逸脱した行動」として赦さない、とされたことも当時の社会情勢からすれば無理からぬことであつた。



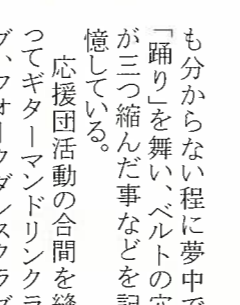
この日、生徒代表等と松岡教師がどのような話し合いをしたのか、例外的には知る事ができなかったが、その日はとにかく解散となった。

問題は跡処理である。生徒たちの要望は全面否認され、責任者処罰の件が残された。

結論は、甲田作衛校長が、「一切を不問に付す」ということにされ、「一人の犠牲者も出さずにすんだ。」

もし、あの場合責任者処罰となれば、恐らく無期停学であろう。そうなれば昭和十三年卒業の上田中学は、ナンバースクールの上田中学は、地方の高等学校、陸海軍関係の合格者は壊滅の運命となつたであろう。

小林軍治君は、中学五年の時柔道二段、級長である頃面倒な



私にとつての高校生活三年間は文字通り「青春真つ只中」であつた。但し勉学に励むという一点を除いてであるが。当時私は「杏の里」更埴市森に住んでいたから、自転車と信越線を乗り継ぎ片道一時間半程かけて通学していた。受験への期待感と高校生活への期待感に胸高鳴らす毎日であつた。

入学直後からの応援練習の雰囲気は、床の抜けそうな講堂との相乗効果で、さすがに驚きと緊張感で臨んだ。しかしあの雰囲気も満更嫌いではない、不思議と拒絶感はない、思ひ来なかつた。その後に応援団員募集には即座にに応じ、結局三年間在籍し副団長にまで出世するに至つた。その間野球を中心にかなり自虐的・自己陶酔型応援団生活を送つた。応援練習中の後輩が顔をはずし大慌てをしたり、高校野球夏の大会で準々決勝まで進んだ時は、試合の決着が付いたの

ある「自分史」

中曾根義明(四八期)



四八会の多くの者は、満州事変の始まった昭和六年に生まれた。昭和十九年戦争のさなか、上田中学へ入学、二年生の八月に終戦を迎えた。その後、学制改革により昭和二十三年上田松尾高校二年へ編入、昭和二十五年卒業、その間中学四年、高校二年都合六年間、今の人の倍の年月古城の門を出入した。それが原因かどうかわからないが、ヘキがあるよう、いつもどこかで、誰かが、大小群れているのは別にして、四八会の総会は、別所か戸倉・上山田で隔年開催。関東四八同期会も隔年、地元での総会と交互に開かれていた。その他に、ゴルフコンペが軽井沢で春秋二回、今秋で二五回を迎える。さらに関東四八会は今春八〇回の記念コンペを開いた。こう書くとゴルフの上手が揃つていよう誤解されそうだが、六組と七組のコンペで一〇〇を切るのが、三、四人といつて控えめな面々ばかりだ。しかも、「一同、スニアの方は、近年長期低落傾向を示しているのに、ヒマ人

宿題が出されると、朝早く学校へ来て、黒板に解答を書いて私達を指導する男気があつた。

戦後、何かの用で彼の家を訪ねたことがある。あいにく彼は留守で、彼の奥さんと昔話をした。その中で、私は「小林君は中学時代文武両道に秀でていた」と話したところ、奥さんが「主人は中学時代ねむくなる」と、家の前にある横積みした材木、雪の積もつて上を裸足で立つて電柱の裸電球の下で勉強したそう「すね」と言われた。(彼の家は材木屋であつた)

奥さんは更に、私が孫達におちいちゃんのこの話をすると、「時代が違ふ!」と聞く耳を持ちませんが、「こんな日本でないでしようか?」と言われた。

「これだから、今もつて彼等に頭が上がるらない。」

私は、十年前になるが、足かけ五年の軍隊生活から、中央公論のなかたこととして発刊し、恐る恐る優秀な畏友達に発送した。落ちこぼれの作品に、彼らが絶賛してくれたので、私もこれでやつと安心して死ぬける、と彼等に頭を下げるのであつた。

高校時代の思い出、そして今

唐澤(旧姓小見山)秀子(七六期)



私の高校生活は、吹奏楽に明け暮れた日々でした。

朝練でクラリネットを吹いてから授業、昼間は先輩に会費を欠かさないよう注意し、放課後は六時まで練習しました。野球の応援で球場までリヤカーを引いたり、新歓コンパで千曲公園まで走つたり、自炊の合宿を経験したり、毎日が夢中でした。幸運にもコンクールの晴舞台を経験できました。顧問の永井先生の親身な指導の賜物と感謝しています。

三年間、もう少し勉強しておけば...と反省もしますが、でも、そこで出会ったすばらしい先輩達、苦楽と感動を共に味わつた友、そしてあれ程まで熱中できたそのこと自体が私にとつて人生の宝となつています。

数年前より図書館もIT化が進み、本の貸出・管理用パソコン一台とインターネット検索専用二台が導入されました。社会、国語、総合などの学習では資料収集のために、図書館をこれまで以上に利用するようになりました。情報の質・量ともに充実が望めますが、資料購入予算があまりにも少なう要求に答えられていないのが現状です。

また一方では図書館が不登校生の居場所であり、一般生徒の息抜き場となる学校のアシス的な面も求められています。

年上の先輩達が卒業二十周年記念の会を開きそこに参加させて頂きました。本当に懐かしかったです。再会でした。

大学卒業後は小学校に勤めましたが、結婚後退職し、その後は三人の子育てに追われておりました。縁あって昨年より松本市内の中学校で図書館の司書の仕事をさせて頂いています。



林守(三九期) 下諏訪町

林医院

加齢の現象を泌々実感してゐる近況ですが、何とかがんばっていますのでよろしく。

大槻廣(四三期) 松本市

中学校教員を三七年間勤め定年退職しました。現在は二〇〇八年間病妻の介護に明け暮れておりますが元気で

北見(内堀)嘉昭(五一期) 松本市

諏訪青陵高校の非常勤講師を今年三月に退任しました。

常田長時(五二期) 松本市

昭和電工塩尻事業所診療所

「高齢者」に分類されるようになりました。「どの川にも子供の歓声が聞こえるように」と官の工事にささやかな抗議をしています。女鳥羽川にもうるおいと活気が欲しいと思うこの頃です。

藤澤良彦(五二期) 松本市

松本平第九を歌う会の事務局長をしています。全て市民が運営していますが、スタッフ不足で悩んでいます。手伝って頂ける同窓会員の方連絡をお待ちしています。十年は続けるつもりで運営にあたっています。

〇二六三五八・八二二一

林庄平(五二期) 下諏訪町

下諏訪町役場

景気動向が急降下する中で、先にかに光を見出すべきか、模索に詰まりでいる状況です。

北沢和雄(五六期) 松本市

四月に教職を去り、自由な身となりました。自然観察インストラクター(天文)で各地の星空教室へ出かけています。市民団体の事務局もやっています。



田中(母袋)瑞穂(五八期) 伊那市

年金手続きを済ませました。同期の皆さんの多くは定年という区切りの年です。少しは自分のことを考えたこれからの生き方をしていきたいと考えますが、現実には毎日の生活に追われてしまいます。

掛川幸四郎(五九期) 諏訪市

五九期会、卒業後四十周年記念総会で、久しぶりに校歌・寮歌・凱歌を恩師二名、同期五十五名と歌つてきました。

丸山(伊藤)勝彦(六一期) 豊科町

長野銀行

「上田高校」の名前を見ると聞くと、いまだに胸が痛くなるほどなつかしいです。

赤田(樋沢)恒子(七三期) 穂高町

穂高に移り一七年。育児がやっと一息つきました。

工藤(三井)淳子(八一期) 榎川村

夫、三人の子ども、夫の父母との七人での暮らしも五年がたとうとしています。木曾には、上田の方の出身者があまりいないので、ちよつと寂しいです。

五十嵐俊一(八二期) 諏訪市

セイコーエプソン

諏訪に住んで十一年。今年から家庭菜園を始めました。

佐々木(小林)美保(八三期) 松本市

二才・四才の子どもの生活。毎日体力的にも精神的にも「へトへト...」育児って楽しいけれど大変ですね。

中南信以外で活躍の方々

由井崇(六一期) 東京

イトーヨーカドー

四年間楽しみのお世話になりました。松本から東京本部へ異動になりました。実に三十年の間で十一度目の転勤となりました。在松中は大変お世話になりました。また、三年前に札幌へ住居を(終の住として)構えましたので、皆様のお越しをお待ちして居ります。

小池健司(五四期) 中国

一九八四年、長野県教育者訪中団員として、黒竜江省や吉林省の農村を見て回るなかで目にしたものは、NHKのドラマ「大地の子」に出てくるような人々の生きざまでした。

二年後に信濃教育会は百周年記念事業で百余名の大視察団を中国に送り込み、私も事務局員として参加し、わずか二年の間の中国の変化の早さに驚きました。(現在はさらに急速度です)

かつて日本と中国の間には、暗い不幸な歴史の時代がありました。特に長野県(信濃教育会)は、青少年を旧満州国(現東北地方)へ送り込む国策の先頭に立ち、その結果は多くの残留孤児を生み出す悲劇を招きました。

私は、同じ教職につくものとして、「胸のいたみ」を忘れることができませんでした。日本の孤児を育ててくれた中国に対して、今の私にできることは何かを考えたとき、現地で語学指導をしながら、日中友好の小さな橋渡しができればと思います。中国へ渡り、北京語言文化大學・吉林省延辺大学・湖北省汽車工業学院と渡り歩いて、今年も新学期(九月)より、湖北省の教壇に立つております。

数多くの日本の企業が中国へ進出をする状況の中で、日本語を身につけた教子たちの前途に道が開かれることを念じつつ、彼らの血のにじむような努力に支えられて、日夜がんばっております。

事務局から

支部の会費についてのお問い合わせがありました。現在中南信支部では、総会の会費で一年分の通信費・印刷費等を賄っております。多くの方の総会への参加をお願いいたします。

文中カット

武村洋治氏(五八期)